

『竹田大からくり双六』について

——からくり研究資料としての絵双六——

山 田 和 人

からくりに関する文献資料は必ずしも豊富とはいえない。我々の前には現在、絵尽や番付、また、浄瑠璃・歌舞伎などの絵入り本の挿絵と本文、浮世絵、絵本、芸能記録などがある。からくりの演目や興行の実情について吟味していく場合には、できるだけ多くの用例を集めたい。というのも、からくり研究はからくりの変化の相をいかに捉えていくかが課題であり、それを跡付けていくためには複数の絵画資料から、その動きを帰納していくという方法をとることが多いからである。その意味では、緊急に資料を整備していく必要がある、同時にそうして整備されてきた資料、おそらく、今述べたように、中心は画証ということになるので、絵画資料をからくりの研究資料としていかに活用していくのが今後の重要な課題の一つである。ただ、研究の現状は、そうした課題に向き合いつつも、なお、資料整備の段階にある。我々ができるだけ多様なジャンルから、からくりの研究資料を集め、資料批判を詳細に進めていかなければならない。

本稿では、そうした意味において、従来、からくりの研究資料としては、あまり注目されることがなかった遊戯関

『竹田大からくり双六』について

『竹田大からくり双六』について

連資料の一つである絵双六を取り上げてみたい。からくりは、その享受のされ方から言えば、遊戯の世界にきわめて近い位置にあると言える。その意味では、遊戯関連の資料は、今後、さらに探求されるべきだと筆者は考えている。それはともかく、絵双六の中に竹田からくりを取り上げたものが一枚ある。今後の調査では、絵双六のみに止まらず多様な遊戯関連の資料が出てくるかと思うが、今回は、一枚の絵双六に限ってその資料価値を吟味しながら、今後のからくり研究の課題について考えてみたい。

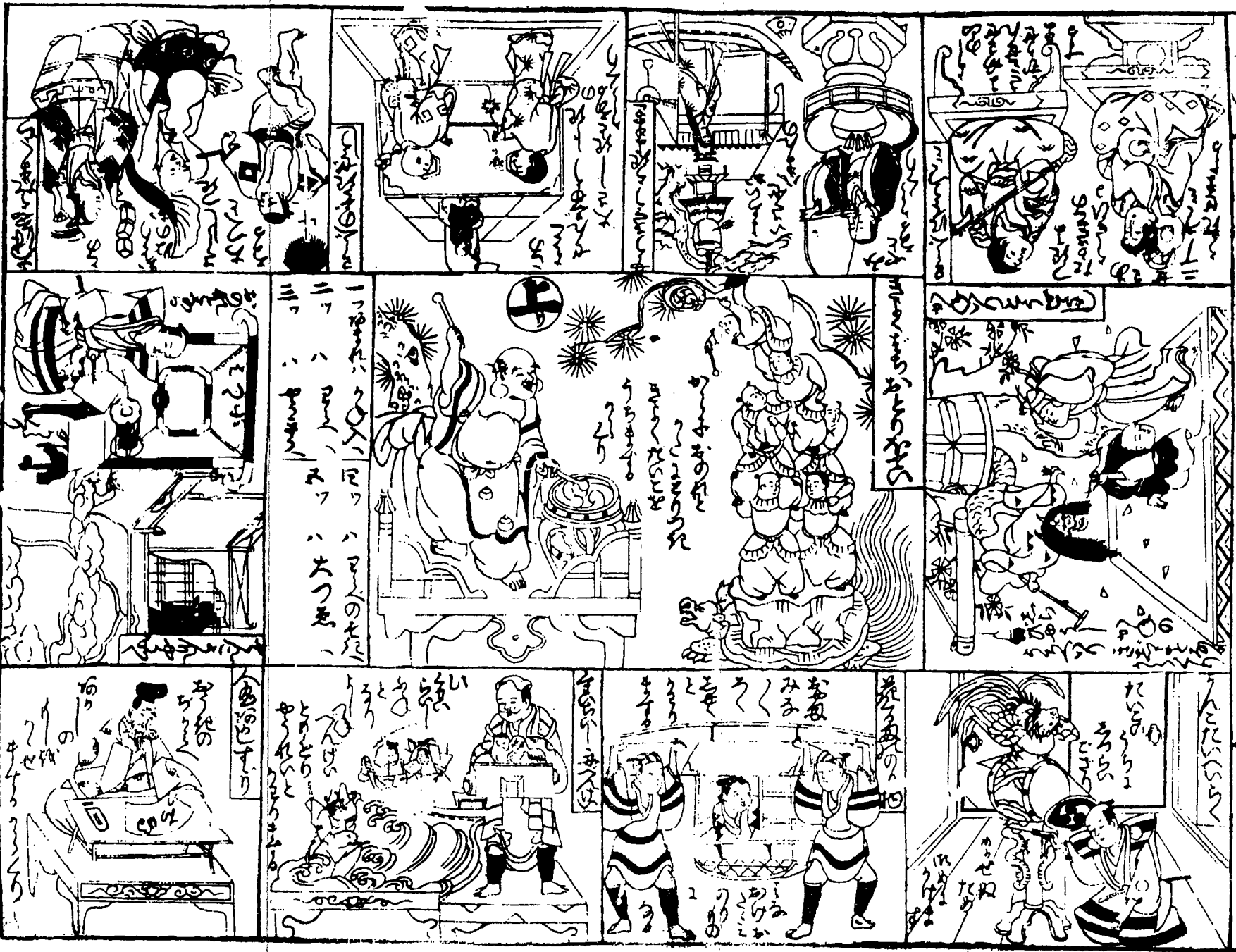
一、『竹田大からくり双六』について

本稿で扱う『竹田大からくり双六』は、東京国立博物館所蔵の一枚である。その形式は、右端に「竹田大からくり双六」とあり、その上欄に竹田の紋が描かれ、下欄に丸に三つ鱗の鱗形屋の商標が記された、江戸版の双六である。通例の双六と同じように、右下の「かんこたいへいらく」から振り始め、「きよくばちおとりほてい」で上りとなる。その間に九図のからくりと踊りが割り当てられている。竹田からくりの絵画資料としては、合計十一図ということになる。

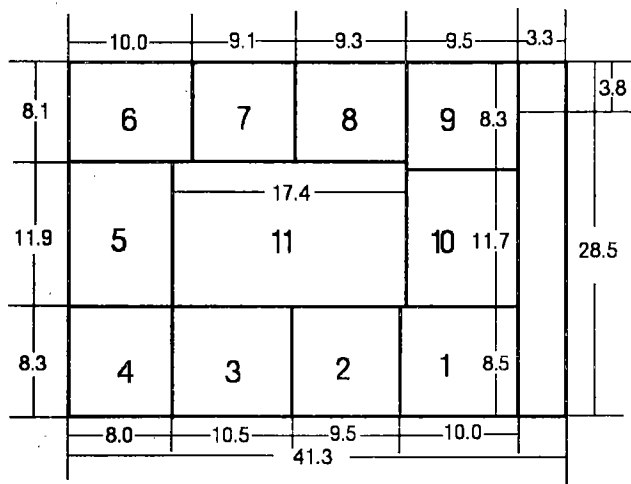
なお、本双六は、東京国立博物館所蔵の『雙六類聚』の中に収められている。同書は、多岐にわたる絵双六を蒐集した貼り込み帖で、墨刷りと色刷りの絵双六、七十枚を収めている。仮名垣魯文の跋文があり、それによれば、同書が勝海舟をして「故人柳亭が還魂紙の材料」と評せしめた逸品である。中には手書き極彩色の仏法浄土双六も含まれており、古板の絵双六が収められている。同書については、関忠夫氏の「『雙六類聚』雑考」⁽⁴⁾に譲ることにして、次



竹田大かゝりの交心図



この双六を切り取り線で切り離して、本稿の双六各図の分析内容との対比および本稿に掲載した写真資料との比較のために、ご参照ください。



竹田大からくり双六匡郭寸法

に簡単に書誌についてまとめておきたい。

寸法 縦三十・六センチ、横四十三・八センチ。

匡郭 縦二十八・五センチ、横四十一・三センチ。

所蔵 東京国立博物館。

種類 廻り双六。

板元 鱗形屋孫兵衛。

絵師 不祥。

刊年 不祥。

関氏は、前掲論文において、『竹田大からくり双六』の板行年代について次のように推定している。

竹田座は寛文二年（一六六二）大坂道頓堀に創立開座し、およそ一世紀にわたって活動して明和五年（一七六八）閉座した。この間にあって、寛保元年（一七四二）江戸に下って堺町で興行しており、同年正月の赤本で西村重長の『大からくり絵』（鱗形屋板）が板行されている。このことから、この双六も同年頃、同じ鱗形屋から西村重長の筆によって板行されたものであらうと考えられる。

関氏の推定の根拠は、おそらく、これだけではなく、絵師の画風も含めてのものと思われる。本双六が江戸の鱗形

『竹田大からくり双六』について

『竹田大からくり双六』について

屋から板行されており、絵双六の中には、芝居の興行とも関連するものが含まれていることなども考慮されているのであろう。いうまでもなく、絵双六の中には、板行当時の風俗が盛り込まれていることが多く、絵双六は格好の風俗資料の一つでもある。その意味では、本双六が竹田の江戸下りと関連を有するという推定は説得力をもっている。

ただし、竹田の江戸下りは、関氏の指摘されるように寛保元年のみではなく、すでに知られているように、元禄十五年、寛保元年、宝暦七、八年、明和四、五年頃、安永六年と少なくとも五回は行なわれている。とりわけ、寛保と宝暦、明和の江戸興行は非常に人気を博した。その人気を当て込んでいるとすれば、この双六の板行の時期も、寛保元年に限られるとは必ずしも言えない。しかし、やはり、画風からいえば、宝暦、明和までは下らないように思う。

また、関氏のいう「大からくり絵」は、おそらく『大からくり繪畫』をさすのであろうが、このあたりの記述は水谷不倒氏の『古版小説挿畫史』^⑤によられたのであろう。水谷氏は、西村重長の赤本として、「大からくり繪畫 三 寛保元年正月鱗形屋」として、『大からくり』は、竹田からくりが、江戸に下り、堺町で興行した時の繪番附で、年號のあるものゝ内、最も早いものである」と指摘している。この記述に従えば、これが江戸において刊行された絵本体裁のからくり絵尽の最も古いものということになる。だが、残念なことに、現在、同書の所在については不明であり、どのような内容のものであったのかは不明とせざるを得ない。因みに、稀書複製会本にも『大からくり絵尽』がある。ただ、祐田善雄氏の指摘^⑥にある通り、『大からくり絵尽』は、宝暦七年刊の『竹田大からくり』の続篇として翌年板行された『竹田新からくり』（以後、『大からくり絵尽』という呼称は避ける）のことであったのだろう。両者の関連については、『大からくり繪畫』を見ることができない現在、明かにすることはできない^⑦。

絵師については不明とせざるを得ないが、『日待のときとんざく新じ口』の画風に近いように思える。同書にも竹

田からくりの二挺鼓をパロディー化した一図が含まれており、竹田からくりが江戸の地において人気を保っていたことがわかる。この赤本板行の時期については、外題上欄の蛇形が巳年を表わしており、その点から、元文二年説と寛延二年説が行なわれている⁹⁾。この赤本との関連も合わせて、その画風から言えば、本双六が少なくとも宝暦、明和以前に板行された可能性は高いように思う。とすれば、本双六は竹田の江戸下りのうち、寛保元年の江戸下りを当て込んで板行されたという推定が成り立つように思われる。もちろん、元禄十五年以降、竹田の江戸下りがなかったという前提においてはであるが。この推定が許されるならば、従来、寛保元年の竹田芝居の絵画資料が見出せなかっただけに、この絵双六の資料価値はきわめて高いものになる。

ところで、本双六に描かれた絵はからくりの研究資料としての程度の価値を有するのか、あるいは、どれくらい忠実にからくりを写しているのか、また、仮りに忠実に写しているとしても、それはからくり絵をそのまま写したもののなか、舞台を写したもののなか、そうした点が問題になる。これらについては、各図を吟味していくことで答えていくべきであろう。そこで、いささか煩雑かとは思いますが、骰子の目を一つずつ振るつもりで、それぞれについて検討を加えていくことにする。その際、比較対照できる竹田からくりの絵画資料を掲出しながら、それらとの比較を行なっていきたい。もちろん、現在、管見にいるわずかな資料の範囲でしか検討できないことをあらかじめ断っておきたい。

なお、本双六はすでに『江戸時代図誌』¹⁰⁾第三卷大坂の部に写真掲載されている。

二、双六各図の分析

1 振り始め「かんこたいへいらく」（諫鼓太平楽）

本文「たいこのうちに しつらいござりませぬため 御めにかけます」



『竹田新からくり』

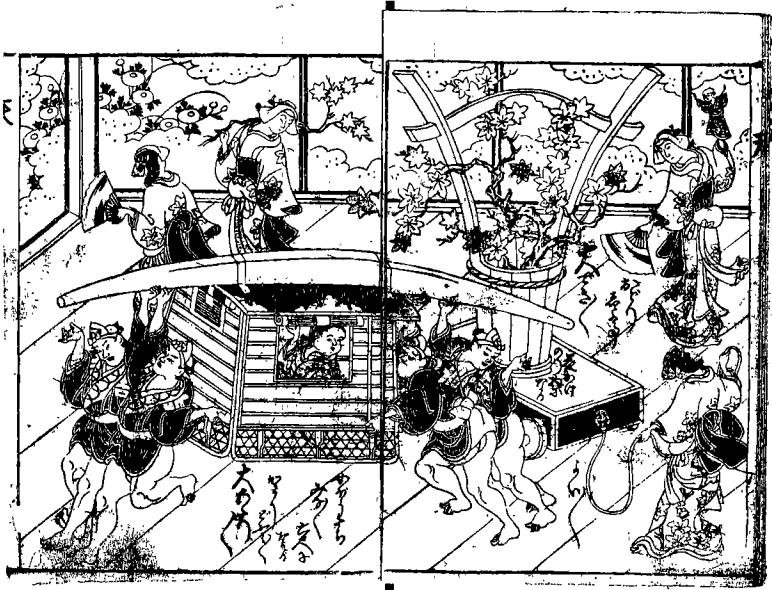
絵は、太鼓の皮が左右に開いて太鼓の中に仕掛けがないことを示している。このからくりは、まず、太鼓が自ずと鳴り、その後、太鼓の中が空洞であることを示すために、太鼓の皮を左右に開いて観客に見せる。そして、閉じた後、再び太鼓を鳴らしてみせるからくりである。『竹田新からくり』の「前からくり 諫鼓泰平楽」本文によれば、「たいへいのみよをしゆくしましにて にはとりにときをうたせまするからくり」であり、大坂表の神事の太鼓、芝居の櫓太鼓などを打ちわけ、「たいこの内をひ

らきあらため御めにかけまする」からくりである。『機関千種の実生』の「大からくり 諫鼓太平楽」に「此たいこぶちをあてませすおのれとおとを出しまする」その後、「たいこのかはをひらきうちをあらためますればむかふまへともみにとをしでござります」とある。『機関蒙鑑草』の図解によれば、絵に描かれている支柱の中に太鼓を打つ撥に相当する装置が内蔵されており、それが折り畳み式で、支柱の中を上下するようにしているために、太鼓の皮を開いたときにはなにもないように見えるのである。また、寛政年刊の『撰津名所図絵』にも「舟弁慶」とともに描かれており、竹田の代表的なからくりの一つである。細かなことだが、『機関蒙鑑草』の図解に従えば、支柱の脇の龍は単なる装飾ではなく、この中を引き糸を通して、これによって、鶏を働かせたのである。前述したように、支柱の中には太鼓をうち鳴らすための折り畳みの撥が上下するようになっており、そのために鶏を動かす引き糸は外を通さなければならなかったのである。この双六にも龍が支柱の脇に描かれており、絵尽の絵柄とほとんど一致しており、ほぼ同じ構造のからくりと考えられる。なお、この絵双六には、太鼓の上のっている鶏が羽ばたきをしているところが描かれており、『機関蒙鑑草』の図解の記述を裏付けることができる。絵画資料の中では『竹田新からくり』に近い。

「諫鼓太平楽」は、当代を寿ぐ祝言的な役割を担うからくりであり、そのために、『竹田新からくり』の上巻最初の前からくりとして掲載されており、『機関千種の実生』も三巻に仕立てた中巻巻頭のからくりとして掲載されている。この絵双六の振り出しが「諫鼓太平楽」であることは偶然ではなく、むしろ、そうしたこのからくりの祝言的性格と関係があるのであろう。少なくとも、振り出しには最もふさわしいからくりということである。

2 「花くるまのり物」(花車の乗り物)

『竹田大からくり双六』について



『機関竹の林』

本文「おやまみなくくろくしやくとかわりまする」「はなおけおたゝみのりものになる」これもからくり絵尽の中にその用例を見出すことができる。ただし、それはからくりの例としてではなく、踊りの例として記されている。それと比較してみると、やはり、本文を含めて、ほぼ絵尽の絵柄と一致している。『機関竹の林』では「踊り 薄化粧花車乗物」として、「おどりしよ事大できく」「花おけのり物になる」「よいく」「女ぼうたちみなくく六尺になりかわりどふもく」「大あたりく」とある。また、『竹田新からくり』には「第四おどり 花車乗物」として、「此おどりはしめはさがりぼうしきたる女中花をけを引出おどりまして 次にみなくくろくしやくとかわり はなをけるまをのりものにしたてかきこみまする」「さがりぼうしはみな三尺でぬくいになりかしらをまきます」とある。『機関千種

の実生』では「第四おとり風流花車駕」として「さいしよはふりそでのおやまはなをけをひき出しはらくおとりがござります」のちにふりそではろくしやくとなり花をけはのりものとかわかります」とある。

絵柄から言えば、『機関竹の林』が比較的類似している。それによれば、最初は四人のおやまが花桶を引いて踊り、後におやまの帽子が手拭いとなり、姿も六尺となり花桶も駕籠に変わるといふもので、竹田芝居の踊りの中にはこうしたからくりと一体になったものも演じられていたようである。ただし、絵双六の方は二人の六尺が駕籠を担いでいるところが描かれており、他の画証が、花桶を引くおやまから駕籠を担う六尺への変化を異時同図法で描くのに対して簡略化されている。双六の紙面から言えば止むを得ないところであろう。

それはともかく、踊りが、からくり双六の中に収められているのは偶然なのか。いや、そうではあるまい。踊りは後述するように絵双六のなかにもう一例あり、竹田芝居の踊りがやはり、からくりと結び付いた変化舞踊であったために、からくりと同様に扱われたと考えるのが自然なように思える。少なくとも、からくり双六の中に踊りが含まれている事実は、この絵双六が踊り、狂言、からくりの組み合わせによる竹田芝居の興行の実情に即して描かれていることを物語っている。

3 「くわいらいし舟べんけい」(傀儡師舟弁慶)

本文「此くわいらいしふねとなり よしつねべんけいとももりゆうれいとかわりまする」

からくり台の上に載っているのは傀儡師人形で、首掛けの箱には後にとび出す山猫が描かれている。この傀儡師のからくりは、元来、第一(序段)、第二(本段)、第三(終段)の三段構成になっている。最初は、箱から出てきた唐

『竹田大からくり双六』について



『家土産竹の林』

竹の林』には、知盛は、吹き出しの雲の上に描かれており、『機関千種の実生』では、海上に浮かぶように描かれている。吹き出しは、からくりの変化を一場面の中に集約的に表現してくれているのだが、これでは、知盛の人形が傀儡師人形と異なって、どのように遣われたのか、明確に捉えたいという憾みも残る。それが、この絵双六の絵によって、初めて、具体的に知盛の人形が別のからくり台の上で演じられたことを確認できる点において、貴重な用例となっている。しかし、この絵双六の描写において、本来吹き出しを用いることで、その変化を示していたのが、吹き

子の人形が唐人唄などに合わせて踊る。その後、傀儡師人形が折り畳まれて姿を消し、場面が舟弁慶に変わり、大物の浦から船出した義経一行の舟の前に、滅ぼされた平家の幽霊平知盛が出現し、一行にさまざまに怨みをなし知盛は雉刀を振り回して荒れ狂う。義経は太刀を振り上げて応戦するが、打ち物技では叶うまいと弁慶が数珠を押し揉み、亡霊を禱り伏せる。禱り伏せられた知盛が海に消えると、折り畳まれていた傀儡師が元に戻り、その後、箱から現われた山猫がさまざまに働きながら、見物の中に飛び出していく。このからくりについての詳細は、拙稿「竹田からくり『傀儡師』について」^④においてまとめておいたので、そちらを参照していただきたい。この絵柄で注目されるのは、知盛と傀儡師人形が別々のからくり台に載っている点であろう。『竹田新からくり』、『機関竹の林』、『機関梅早咲』、『家土産

出しの表現をとらなくなつたために、傀儡師とその背後の義経、弁慶の乗っている舟との関連がこの絵からだけではとらえにくいという弱点もある。なお、『竹田新からくり』と『家土産竹の林』では傀儡師の箱には、唐子ではなく、山猫が描かれており、絵画資料としては、『家土産竹の林』の例を掲げておいた。

4 「人丸あかしすゞり」(人丸明石硯)

本文「おうぎのぢかみへ あかしのもしをかゝせまするからくり」

いわゆる文字書きのからくりである。宝暦八十年、大坂、竹田芝居の番付(演劇博物館ロー八―六五)に「人丸明石硯」があり、「人ぎやうさまぐはたらき後



竹田芝居番付

あかしといふもじをかからくり」と記されている。また、『銘菊艶』(演劇博物館)にも、「人丸のにんぎやうあかしといふもんじをか」とあり、両者とも、絵柄も類似しているばかりか、演目の名称も同じである。当時の竹田からくりの一般的

なものの一つである。

5 「てんこうんりやうかく」(天鼓雲龍閣)

本文「小つみみおのれとなるからくり」

『竹田大からくり双六』について

『竹田大からくり双六』について



『若楓東雛形』

かれており、口上人が直接鼓を納めた箱を開いているのに対して、本双六では、異時同図法は用いず、箱を開いた横に口上人が座って口上を述べているというちがいがあ

『機訓蒙鑑草』には「天鼓のからくり」として、「天この謡に合まして箱の中のつゞみおのれとひやうしをとりまする」絵と、その図解が収められている。それによれば、鼓の箱を吊るしてある四方の綱の中に引き糸を通して、その引き糸で箱の中の鼓を打つ撥の装置を操作して鼓を内側から鳴らすのである。綱の中を引き糸を通して見物から見えないようにするのが工夫である。撥には鯨の髭の反発力を利用されたようである。このからくりは、言うまでもないが、『用明天皇職人鑑』の表紙見返し

の挿絵にも描かれており、同様のからくりがそこでも演じられたものと考えて間違いない。

「天鼓雲龍閣」という呼称で、楼閣に鼓を打つ影が写るといふ趣向は管見に入る範圍ではあまり見ない。謡曲では、帝の勅命で呂水に沈められた天鼓の父王伯が、帝に請われて雲龍閣で天鼓を打つという場面がある。「鼓の時も移るなり、涙を留めて老人よ、急いで鼓打つべし、げにげにこれは大君の、忝なしや勅命の、老いの時も移るなり、急いで鼓打たうよ、打つや打たずや老い波の、立ち寄る影も夕月の、雲龍閣の光さす、玉の階玉の床に、老いの歩みも足弱く、薄氷を踏むごとくにて、心も危きこの鼓、打てば不思議やその聲の、心耳を澄ます聲出でて、げにも親子のしるしの聲、君もあはれと思しめして、竜顔におん涙を、浮かめ給ふぞ有難き」^⑩。楼閣に写る、鼓を打つ影は王伯である。こうした舞台装置を設けて、ストーリー性を持たせた舞台演出がなされていた可能性を示している例として注目される。これが仮りにからくり絵尽の絵を写したものであるとしても、その絵尽がそうした演出を踏まえて描かれたものであることには変わりはない。絵柄は『若楓東雛形』と類似しているが、今述べたような点において、この双六の絵は画証として興味深い。

6 「大津をうたまくら」(大津絵歌枕)

本文「このおとりぬのおさらし つき大つへとなる」

これは、本文に踊りとあり、先の「花くるまののり物」と同じく、からくりではなく踊りである。ただし、この踊りの例は管見にいるかぎり他に類例を見ない。絵に描かれている枕返し、瓢箪絵、奴はすべて大津絵の画題に由来するものであるが、これらはからくりの中にも類似したものを数えることができる。『機関竹の林』の「七化追分姿」には、枕返しの若衆、瓢箪絵、さらに酒飲み奴等が描かれている。奴等が毛鎧をもった奴とは異なるが、あとの二例は一

『竹田大からくり双六』について

『竹田大からくり双六』について

致する。『機関千種の実生』には「前からくり 七化追分姿」があり、いわゆる藤娘、鬼の念仏、座頭とともに、枕返ししの若衆が描かれている。これらのからくりは、人形がつぎつぎに変化していくさまをからくりで見せていくものである。本図の枕返し、瓢箪鯨、奴の踊りは、竹田大からくりによく見られるからくりを素材にしたものと考えられる。先の「花くるまののり物」の例にもあるように、竹田の踊りはからくりと一体化した変化舞踊という一面を有しており、両者に共通した題材が選択されることもさして不自然なことではなかった。この場合も、そうした変化舞踊の例としてとらえるべきであるが、竹田の踊りの例から推定して、おそらく、布晒しの三人の子供役者が枕返し、瓢箪鯨、奴に変化したものと考えておきたい。一人の子供役者が三態に変化したとも考えられるが。

7 「わらべのぞぎぜうし」(童覗き障子)

本文「このはこ せんじやうじきの大きしきとなるからくり」

『機関千種の実生』には「大からくり 邯鄲榮花春」という大からくりの例がある。その本文は「かざりおきましたるのぞきがらくりはわづかのはこの内へ千ぜうじきをつもりましたるさいく さいしよはほうしの人形かねをうちますると はこはことくひらけひろがりまして千ぜうじきのゑんとかはり」、やがて「左右の子供は東西金銀の山こがねしろかねの日りん月りんとなりまする」。そして、「さてはるかむかふくわとう口のきぬをまきあげますれば」、女郎が炬燵の上で猫をそばやかし、左右の梯子を上り下りして給仕する者、長廊下を履き掃除する者、二階には主人がたばこをのんでいるところ、など、それぞれの人形が動き、「ことのほかごまかなるつもりさいく人形はことくくはたらきます 御きをつけられませふ」と記されている。その後、「もとののぞぎのはことくみかへしまするから



『機関千種の実生』

くり」で、千疊敷の場面から、また元の覗きの箱となるからくりである。

このからくりは覗きの箱が千疊敷に変化し、また元の覗きの箱に戻る大からくりである。そのうち覗きの箱の前で子供が穴を覗き込んでいる絵柄が、選択されている。そのために、当然千疊敷に移ることを示す吹き出しは描かれていない。その絵柄は、鐘を打つ法師の人形が座っているか、立っているか、子供が覗きの箱側に向いているかどうか等の相違を除

けば、ほぼ『機関千種の実生』の絵と一致している。なお、このからくりとまったく同じものが、宝暦七年刊の『竹田大からくり』にも描かれていたことは、祐田善雄氏の指摘⁹⁾にあるとおりで、絵の中の本文もほとんど一致している。

この覗きの箱の場面が選択されたのは、おそらく、後の千疊敷の場面よりも、覗きからくりの絵柄の方がこのからくりの実情をよく表わしているといった双六作者の判断が働いたためであろう。

『竹田大からくり双六』について

『竹田大からくり双六』について

8 「やうきやうきよまと」(楊弓浮世的)

本文「よろいおいさせ 八まんのみやとなるからくり」

この絵柄は、楊弓ではなく吹矢の場合に多く見られる。たとえば、『家土産竹の林』には、扇の的と松に掛けられた鎧が描かれている。この鎧は次の絵尽の絵と本双六の絵を合わせてみると、からくりのよう矢が当たると、鎧が宮に変化していくことがわかる。宝曆九年十一月竹田芝居の絵尽(中之島図書館九七四―四四)には「からくり 童吹矢一曲」とあり、本文には、最初に「あふぎのかなめをふききる」「ろうそくのしんをふききる」とあり、さらに鎧に吹矢が当たると宮の社になるという内容の本文と鎧から吹き出しが出て社に変化することが示されている。

以上は吹矢の例であるが、楊弓の用例としては、阪急池田文庫所蔵のからくり絵番付(からくりおのゝ小町七夕まつり)に「にんぎやうさまふく」とようきう□□ふからくり□あたり」「よろひみやと成からくり」「まことに矢あたるからくり」「がんとおつるからくり」とあり、鎧が宮に変じるところは同じである。吹矢と楊弓でその演目は異なるのだが、それぞれに同じような趣向を構えていたらしいことがわかる。

本双六の絵柄で面白いのは、鎧が宮に変じる瞬間が捉えられているところである。注意してみると、鎧のすぐ下に、鎧と相似形の屋根の見えるていまい宮の社が連続して描かれており、鎧の中から、宮の社が下がつて台上におりてくることがわかる。まさにからくりのよう鎧に当たると、鎧の中から宮の社が現われるのである。おそらく、玉垣はからくり台の方で立ち上げられるのであろう。また、扇の的が那須の与市よろしく舟に立てられており、その扇の要に命中して、射切られた扇が落ちていくところが細かに描かれているところも面白い。これは絵空事かもしれないが、そうした演出の可能性も想定しておくべきであらう。楊弓の的が、三種類、一図の中に窮屈に押し込まれてい

る印象を受ける。これなど、舞台の的を網羅的に描こうとして、不自然な構図になっている例のように思える。

また、当然のことではあるが、先の絵巻に描かれていた社も本双六の通り、八幡社と考えてよいだろう。

9 「わらべにてうつゝみ」(童二挺鼓)

本文「よしの山にあわせさみせんひかせまする つぎにたかきこのうたひにあわせ二丁つゝみうたせしまする」



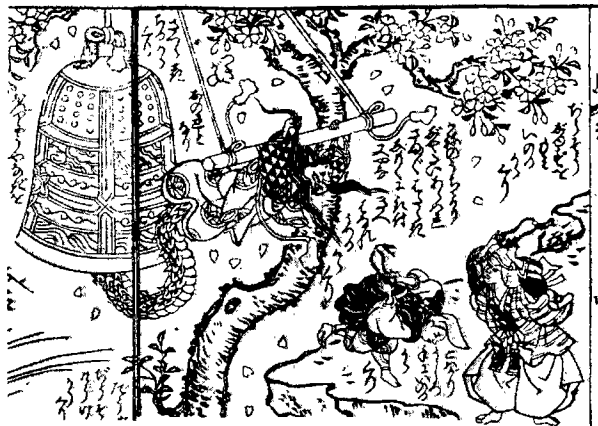
『竹田新からくり』

『竹田大からくり双六』について

『機関竹の林』に「二挺鼓」(目録には「相生二挺鼓」)があり、「此にんぎやうさいしよにしやみせんひき のちに大小二丁つゞみうつからくり」とあり、三味線を前に置いて、二挺鼓を打つところが描かれている。また、『竹田新からくり』に「からくり 三絃二挺鼓」がある、「はや五才になりちゑづきましてさみせんひきしまする こなたよりうたひかけまする よしの山を雪かとみればゆきにはあらで花のふゞきよの」「次に二ちやうつゝみをうたせしまする高砂のきりにあわせします」とあり、絵

『竹田大からくり双六』について

柄も上下と左右の相違はあるものの、ほぼ同じである。細かなことではあるが、二挺鼓としては当然であろうが、ほとんどの場合は肩上方の方の鼓を打つ絵柄である。本図のように、膝上の鼓を打っている例は少ない。からくりの画証という点から言えば、二つの鼓を交互に打つ動きが確実に押さえられるという意味で注目される。



『花艳末広扇』

10 「かねいりとうせうじ」(鐘入道成寺)

本文「しらびやうしかねのうちへいりきよとなるからくり」

道成寺鐘入りの段をからくり仕組んだもの。白拍子の本間の舞から鐘入りとなり、白拍子の人形が、鐘から蛇体となって現われた後、柳へ離れ移るといふからくりである。「竹田新からくり」には、「鐘入道成寺」があり、桜の梢に引き上げられた鐘の内を開いて中をあらためた後、「人々いねむる時つりかねをひきかづきいのりの段にかねの内よりあらはれしゆもくとりつきかねをつきこなたの柳にたくりつきひやうしをふみまする」離れものからくりである。「機関千種の実生」には「大からくり 道成寺佛桜」として、「しばらくうたひにあわせどうしやうじのほんまのまいがござりますきりは人きやうかねのうちへ入ますればじやしんとあらわれます」とある。本双六は、これらとほぼ同じからくりと考えてよいのだが、

絵柄から言えば、異なっている。むしろ、『花艳末広扇』に収められている「道成寺」の「かねのうちよりじやたいあらはれさまぐ」はたらきしもくに取付又やなきへはなれうつるからくり」「ちうそうじゆずをもみいのるからくり」「こはがりうしろ手にいのるからくり」と絵柄も一致している。他の二例との比較の限りでは、本図は『花艳末広扇』に最も近い。道成寺をからくり仕組んだ竹田の代表的なからくりの一つである。



『竹田新からくり』

- 11 上り「きよくばちおとりほてい」(曲
 撥踊り布袋)
- 本文「から子おのれとかたにとりつきき
 よくたいこをうちまするからくり」
- 『竹田新からくり』には「からくり 福
 寿草笑顔春遊」があり、「此さいくは下な
 るからこがだんぐにかさなりまして上な
 るからこはかたをはなれ つりおきました
 るふさにあしをかけさかさにとりかへりた
 いこを打まする さてほていもたちあがり
 はらをへこゝ仕りたいこをうちひやらし
 をあわせまするからくり」とある。絵柄か

『竹田大からくり双六』について

「竹田大からくり双六」について

らみても布袋の向きが左右逆ではあるが、唐子の人数、台座の下の亀、上の唐子の太鼓を打つさまなどきわめて類似性が高い。ただし、上の唐子がぶら下がる房が描かれていないのは不思議である。「機関千種の実生」にも「大からくり 福寿草笑顔春遊」があり、「ほていの人きやうをだいにのせ引出し次にたいこをうちますれば からこたかひに手とてをくみ三じうになりましてのちにだいの上ほてい人きやうことくたからふねとかはりまするさいく」とある。この絵柄には、先の上の唐子は逆さにはなっていない。下の亀は描かれず、代わりに宝舟の宝物が足元に描かれている。

本図はこの双六の中で、他に比して最もからくり絵尽と近い絵柄を有しており、本双六が竹田のからくりをかかなり忠実に写していることを典型的に示している。もちろん、「上り」のからくりとして紙面にゆとりがあるために、その描写が詳細になっているという条件があることは言うまでもない。

「上り」に布袋のからくりを配置したのは、おそらく、その福の神としての祝言的性格からであろう。因みに「福寿草笑顔春遊」は、「竹田新からくり」では「第四」の切り、「機関千種の実生」では「第二」の切りの大からくりとして上演されている。こうして、絵本仕立てのからくり絵尽の各段の切りに演じられるのは、このからくりが大からくりとして人気を博していたことを示している。このからくりが大切りに用いられたという記録を今は見出すことはできないが、その日の興行の大切りにこのからくりが演じられても不自然ではない。むしろ、この双六が竹田からくりの江戸下りを当て込んでいるとすれば、そのときの大切りに布袋のからくりが演じられた可能性は高いと言わねばならない。

これで順番に双六をたどってきたのだが、因みに骰子の目がちょうど出なかった場合には、「一つあまれば かね

入へ、二つあまれば わらへへ、三つあまれば やうきうへ、四つあまれば わらべのそきへ、五つあまれば 大つゑへ」と、余った数だけ戻ることになる。

三、からくり研究資料としての絵双六

このように、この双六に描かれた竹田からくりの演目は、その大半を絵尽や番付で確認することが可能であり、それらがいい加減な絵空事であるのではなく、むしろ、当時の竹田からくりの興行の実情に即したものであることが明らかになったと思う。そればかりではなく、この双六の中にしか現在のところ見出されないからくりや踊りが含まれている例（「大津ゑうたまくら」）、他の絵画資料には見られないからくりの動きを類推させてくれる絵柄が認められる例（「やうきううきよまと」）、舞台演出の可能性について推定の根拠を与えてくれる例（「くわいらしい舟べんけい」）、「てんこうりんりやうかく」など、絵双六の図の中に当時のからくりの動きや演出を知る手掛かりが含まれている場合がある。その意味でも、この双六の絵は、数少ないからくりの研究資料として、きわめて価値の高いものといえる。考えてみれば、絵双六の素材として、当時の江戸の人々にとっても馴染みの深い竹田からくりを選んだ以上、それについて、誤った記述をすることは双六の作者としては許されなかったはずである。

絵双六は、骰子を振りながら、一つ一つの絵柄を楽しみながら複数のメンバーで遊ぶものであり、からくりの双六であれば、劇場で見たからくりの舞台を思い出しながら、あるいはまだ見ていない舞台の様子を思い浮かべながら、止まる絵ごとのからくりの話にうち興じたのであろう。それだけ、興行に近い時期に板行されている可能性が強く、

『竹田大からくり双六』について

『竹田大からくり双六』について

そうした意味において、絵双六は、からくりのみに止まらず、その当時の芸能興行の実情を知る手掛かりを我々に与えてくれる貴重な資料といえる。

総じて絵双六の描写は、絵尽や番付に較べれば、簡略化されているといえる。元来、からくりの絵尽の絵は、からくりそのものが類型証としての資料価値を有するものとなっているといえよう。元来、からくりの絵尽の絵は、からくりそのものが類型を持つということから、類似した構図になりやすいものである。もちろん、類型的であるということがそのまま資料価値の低さには直結しない。それらは類型として描写されるが、詳細に比較すれば、それぞれに微妙な相違があり、その差異に注目していくことによって、からくりの動態を捉えることができる場合があるからである。本稿で取り上げた絵画資料の多くがそうした類型性を帯びている事実は、そうしたからくりの絵画資料の特徴に基づくものである。

概ね、本双六は竹田の寛保元年の江戸下りを当て込んだ可能性が高く、そのときの竹田芝居の興行の実情をよく伝えているものと推定される。竹田の江戸下りの際には、絵本型のからくり絵尽、すなわち、からくり絵本が板行されたようである。宝暦七年刊『竹田大からくり』、翌年刊『竹田新からくり』は西村重長画で、鱗形屋の板行である。明和四、五年頃刊の『機関千種の実生』、『若楓東雛形』は北尾重政画で、やはり、ともに鱗形屋から板行されている。竹田の江戸下りの人気は、上方での評判をはるかに上回るものであり、そのからくりを取り込んだからくり絵本が江戸下りの都度、板行されるのもごく自然な成り行きであった。その際、鱗形屋が板行に関わっており、この絵双六も鱗形屋から板行されている。その点から言えば、竹田芝居の評判を当て込んで絵双六を作る場合にも、絵師の問題も含めて、具体的な取材に手間と時間はかからなかったであろう。

この絵双六の板行時期を寛保元年と推定することが許されるとすれば、この時にも、そうしたからくり絵本が板行されており、絵双六はそれに依拠して作られたということになるのか。水谷氏の『古版小説挿畫史』にある寛保元年の内容を検討することができないために、『我衣』の記事との比較もできず、また、子供役者からの推定も期待できない。さらに、からくり絵本は、江戸歌舞伎の狂言絵本の体裁に倣っていると推定され、その点からいえば、狂言絵本が板行され始めるのが寛延以降であり、それに先んじてからくり絵本が板行されたとは考えにくいという事情もある。また、先の双六各図の検討結果からいえば、この絵双六は、特定のからくり絵本に基づいて制作されたと考ええる必要は必ずしもあるまい。むしろ、竹田の江戸下りの興行の舞台を写した可能性が強いのではあるまいか（くわいらいし舟べんけい、「やうきうきよま」との構図）。

現在のところ、本双六が寛保元年のからくり絵本に依拠しているかどうかは、不明とせざるを得ないが、竹田芝居の興行の実情をそのまま伝えてくれている貴重な画証であることはまちがいない。

からくり研究にとって、資料整備が急務であることについては、すでに冒頭で指摘したが、本稿では、遊戯関連の資料についても検討する必要があるのではないかという問題提起を試みたつもりである。遊戯関連の資料については今後も資料蒐集を続けなければならないが、資料の所在も含めてからくりとその周辺の芸能、遊戯などについて、御教示賜わることができれば幸いである。

また、この双六の分析を通して、竹田からくりの演目とその動態について整理する必要があることを筆者はよりいっそう強く実感している。そのために、「演目別からくりの動態研究」として、竹田芝居を中心にからくりの動きを総

『竹田大からくり双六』について

『竹田大からくり双六』について

合的に把握するべく別稿を準備していることを付け加えておきたい。

なお、本稿を成すにあたり、国立国会図書館、東京国立博物館、東京都立中央図書館、早稲田大学演劇博物館、鳥越文蔵氏には資料の写真掲載をお許しいただいた。資料閲覧に際して、加藤寛氏には特段のご配慮をいただいた。また、神楽岡幼子氏、信多純一氏、土田衛氏には貴重な御指摘、御意見を賜った。記して謝意を表します。

注

- (1) 『MUSEUM』東京国立博物館美術誌 昭和四十五年五月。
- (2) 『古版小説挿畫史』(大岡山書店) 昭和十年四月。
- (3) 『江戸の竹田からくり』『国語国文』 昭和十三年三月。
- (4) 木村八重子氏は水谷不倒氏の言う寛保元年の刊記のある『大からくり繪畫』と『竹田新からくり』との関連を異名同書ととらえ、寛保元年刊の同書の年記を削去したためと推定しておられる(『近世子供の繪本集』江戸編解説)。現在のところ、そう推定しておくしかないとも思うが、後述する江戸歌舞伎の狂言繪本との関連、また、これらのからくり繪本が竹田の江戸下りの都度、板行されている可能性の強い点から見ても、年記を削って摺りましますとも思えない。
- (5) 寛延二年説・木村八重子氏『日本古典文学大辞典』「とんさく新じ口」の項 昭和五十九年七月、元文二年説・岡雅彦氏「赤本『日待のときとんさく新じ口』考」『かどみ』昭和六十年三月。
- (6) 『江戸時代図誌』(筑摩書房) 昭和五十一年二月。
- (7) 板谷徹氏「初期変化物の形成とからくり・手妻の影響」『近世文芸研究と評論』昭和五十一年六月。
- (8) 拙稿「竹田からくり『傀儡師』について——フィールドと文学史の接点——」『歌舞伎研究と批評』十二号、平成五年十二月号掲載予定。
- (9) 『日本古典文学大系』「謡曲集」下。
- (10) 注(3)に同じ。

(1) 拙稿「からくりと古浄瑠璃——からくり『懐胎十月図』をめぐる——」『歌舞伎研究と批評』九号、平成四年六月。

最後に、本稿で双六との比較対照のために使用したテキストの所在をまとめて記す。ただし、本文中で断つたものについては省略した。

享保十五年刊『璣訓蒙鑑草』『稀書複製会叢書』（臨川書店）所収。

宝暦八年刊『竹田新からくり』（大からくり絵尽）『稀書複製会叢書』（臨川書店）所収。

宝暦十年刊『機関竹の林』国立国会図書館。

宝暦十年刊『家土産竹の林』早稲田大学演劇博物館（一八一—八六）。

明和四、五年頃刊『機関千種の実生』都立中央図書館。

明和四、五年頃刊『若楓東雛形』都立中央図書館。

『花袍末広扇』鳥越文蔵編『ペリ国立図書館蔵古法瑠璃集』（校倉書房）所収 昭和四十三年一月。

なお、からくりの研究資料として、からくり絵本、からくり絵尽、からくり番付等の名称についてはあらためて考え直す必要があると筆者は思っている。本稿及び別稿（注⑧）では、いささか用語に不統一な面のあることを断っておきたい。